

氏 名	森原 彩
学 位 の 種 類	博士(英語学)
学 位 記 番 号	甲第 1 4 号
学位授与年月日	2 0 2 0 年 3 月 2 1 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当(課程博士)
学 位 論 文 題 目	Remotivation が発生する条件とは何か —日本の高等学校生徒の英語学習に焦点をあてて—
論文審査委員	委員 教授 柳 善和 委員 教授 城 哲哉 外部審査委員 深澤 清治 外部審査委員 築道 和明

審査結果の要旨

森原彩氏の論文は、「Remotivation が発生する条件とは何か？—日本の高等学校生徒の英語学習に焦点をあてて—」と題して、英語学習の動機づけに関する先行研究を基に、日本の高等学校生徒の英語学習過程における動機づけに関する変化を、生徒の情意的側面から探るものである。学習者の言語学習動機づけは社会文化的な影響や学習者が置かれた環境など様々な要因でダイナミックに変化し続けるものであり、教育的介入により動機づけを向上させることができることから、動機づけが強くなったり、弱くなったりする理由や状況を探ることは教育的観点からも重要な課題である。

そこで、学習者の一時的な動機づけの状態ではなく、長期間の調査の中で、一度弱くなった学習動機づけがもう一度高まる状態である remotivation に焦点をあて、どんな条件・環境で remotivation が起こるのかを探り、教育現場で教員ができるサポートや活動について考察していく。そのためリサーチクエスションとして、(1)Remotivation が起こりやすい時期とそれが起こった理由は何なのか、(2)Remotivation が起こる学習者の動機づけタイプや調整タイプは学年によって変化があるのか、(3)学習者の自己効力感の向上が remotivation につながるのか、の 3 項目を設定した。

先行研究として、森原氏は、(1) 英語学習動機づけ研究の流れ、(2)プロセスとしての「学習動機づけ」、(3)学習者の動機づけ（自己決定理論）、(4)学習者の自己効力感を向上させる活動とは、という 4 つの観点から調査した。そして、本研究では、学習者に自己効力感や達成感を得ることができる成功体験の機会を設け、それが学習者の remotivation につながるのかどうかを検証する、としている。

研究協力者は、公立高等学校に通う 75 名(男子 34 名、女子 41 名)で、2017 年から

2018 年にかけて 2 年間の調査を行った。調査開始当初、研究協力者は高校 1 年生であった。この学校は地方にある創立 100 年の進学率 95%の学校である。

それぞれのリサーチクエストに対して、以下のような手順で研究を進めた。

(1)「**Remotivation** が起こりやすい時期とそれが起こった理由は何なのか」については、18 か月間学習者の英語学習意欲について、英語学習意欲・興味の強弱について質問紙にて 5 段階尺度で回答を得た。その英語学習意欲の増減の理由について、自由記述にて回答を得た。調査後、18 か月の間英語学習意欲の推移パターンによって 2 つのグループに分けた。2 つのグループに分けた学習者に英語学習意欲の変動について個別でインタビュー調査を行った。

(2)「**Remotivation** が起こる学習者の動機づけタイプや調整タイプは学年によって変化があるのか」については、各学習者の動機づけタイプを、高校 1 年時と 2 年時 4 月に動機づけに関する質問紙によって調査した。(1)の各学習者の 18 か月間の英語学習動機づけの推移の調査で 2 年次の 4 月に **remotivation** が認められた学習者の動機づけタイプと調整タイプについて、1 年時と 2 年時で比較分析を行った。2 年時の 4 月で **remotivation** が認められたのは 75 名中 51 名であった。

(3)「学習者の自己効力感が **remotivation** につながるのか」については、学習者の自己効力感を高めるための成功体験の機会を設ける活動として、1)選択式単語テスト、2)プレゼンテーション発表の活動、の 2 つの授業活動を行った。その活動前後に、情意面の変化(自己効力感、それぞれの活動に関する感想や学習意欲)について自由記述によって回答を得た。活動後は、満足度について 4 段階尺度を用いた質問紙にて調査を行った。

以上の調査について、以下の分析を行った。

(1)について、研究協力者が高校 1 年次の前半に動機づけの上昇と減退がより頻繁に起こり、その変動の幅が大きいことが分かった。学習者の学習意欲が上昇傾向にあった時期は、定期考査や模試前後であることが明らかになった。学習者の英語学習に対する「好き」「嫌い」といった感情は関係なく、「理解したい」「できるようになりたい」という欲求を抱いていることから、学習者はそのような「分かった」という達成感や「自分はできる」という自己有能感を得たときに、**remotivation** が起こる可能性が示唆されたとしている。

(2)について、学年が上がるにつれ、内発的動機づけは弱くなる一方で、外発的動機づけがより強化される傾向があることが明らかになった。そして、その外発的動機づけ、特に同一視的調整(進路充足)は 1 年時、2 年時ともに平均値が高かった、としている。

(3)については、選択式単語テストとプレゼンテーション発表の 2 つの活動後の学習者のコメントから、学習者の満足度が高まったり、学習者が外国語能力の向上を実感していることが明らかになったとしている。

このような結果から、森原氏は、学習者の自己効力感の向上を図る活動を、教員が積極的に導入することが、**remotivation** に繋がると示唆できる、としている。

論文の評価

本論文は、英語学習者の動機づけが長期間にわたる間に、一度低下した動機がもう一度高揚する状態、**remotivation** に焦点を当てて、その現象が生じる条件・環境を調査し、教育現場で教員がどのようなサポートや活動ができるかを探求する研究であった。

まず第1に、英語学習動機に関する先行研究の流れを4つのアプローチにまとめ、その中で特に、一度低下した英語学習動機が再度向上するという現象に注目していることは、これまでの動機づけの研究の中において未開拓、かつ独創的な視点である。英語学習動機は学年が進むにつれて低下することが一般的であり、否定的に捉える研究が多い中で、動機づけの回復及びその条件に考察を加えたことは高く評価される。

第2に、動機づけの研究は一般性を求める余り、これまでできるだけ大きなサンプルサイズを得て、量的研究の結果から考察されることが多かった。これに対して、量的な研究と同時に、18 か月の間、学習者群を追跡調査し、学習者の個人的な振り返りを丹念に拾いながら、動機の上昇、下降の起因となる条件、環境を調査したことは、教室現場をフィールドとしたアクション・リサーチであり、その成果は普遍性を求めるよりは、限定された環境における一般化可能性を有すると言える。

第3に、多くの類似研究が欧米での研究視点、調査項目をそのまま援用しているのに対して、本研究は日本的な文脈を踏まえて、日常的な学習活動の効果を探ろうとする試みであり、これからの研究への広がり十分に期待できる。

その一方で、本論文で扱われている **remotivation** について、その定義をさらに詳しく議論しておく必要があったかもしれない。動機づけの回復がどの程度の期間であれば **remotivation** と判断するのか、どの程度の強さの回復が必要であるかなどについてである。

以上の点を総合的に考慮して、審査委員会は森原彩氏によって書かれた本論文に対して博士号を授与することが適当であると判断した。